

父の不在、母なるメコン、 そして兄・弟・姉

アニサイ・ケオラ監督The Che Brotherをめぐって

橋本 彩

The Che Brother (ラオ語タイトル:アーイ・ノーン・セ) あらすじ

街に住む男子学生セは姉に呼び出され、久しぶりに森の中の実家へ戻る。実家に戻る道すがら、すれ違った母子がセを訝しげに一瞥した後、急いでガスマスクを着用する。その意味を分からないままセが実家に戻ると、姉の顔に青あざがあり、その青あざがセを呼び戻した原因だと告げられる。姉によれば、世界に蔓延する新種の病気に対するワクチン製造のため、世界に1%しか存在しない特殊な免疫を持った血液を欧米企業が高値で取引しており、その血液を自分たちの母親が持っていると言う。姉の青あざは、その母の血を独占し販売しようとした実の兄が彼女を殴り、母親を拉致していった時にできたものだと聞いたセは、兄と話し合うため、昔から憧れていたチェ・ゲバラを模した服装で兄の元へと向かう。メコン川沿いの豪邸に住む兄は、数人のボディガードを雇って警戒を強めていたが、弟を快く迎え入れる。そこで兄から聞いた話は、姉の話とは真逆の内容で、姉が母の血液を搾取して金儲けをしていて、兄が母を救い出したという話だった。セはどちらも信じられなかったが、姉の作戦に従って母を兄のもとから救い出す。しかし、姉も母の血液を売ってお金を得ていた。セは、自分も無関係でいられないお金に苛まれ、メコン川に佇むが、何かを決断したように一步踏み出す。

はじめに

作品に描かれた場所を特定する内容は語られていないが、ロケは首都ヴィエンチャン近郊で行われている。セとその友人がサイドカー付きのバイクに乗っている場面の背景は、最近開発が進んでいるヴィエンチャン内の地域かと思わせるものの、現実のヴィエンチャンには走っているはずのない電車¹⁾が走っており、見たこともないモニュメントが動いていることから、知っているようで知らない世界、まさに10年後のヴィエンチャンを表しているようである。作品の内容はまるで現在の世界的な新型コロナウイルスの感染拡大を描いたように見えるものの、作品自体は2019年9月頭に撮影が終わっており、初上映は2019年12月10日にMajor Platinum Cineplex

1) 現在、中国の支援により、中国とヴィエンチャンを結ぶ鉄道の建設が進んでいる。

Vientiane Centerで行われていることから、コロナ感染とは無関係に脚本が書かれ、制作されたことが分かる。2020年に入り、世界的なコロナ感染の拡大後に各国の映画祭などで上映が始まったことから、まるで現在の状況を予言したかの内容だと驚きをもって迎えられた。

アニサイ監督はこの作品について次のように語っている。

深刻なダメージを受けているメコン川に直接影響されることがなく、メコン川を景色としてしか見ていない都市部の人たちにこそ、この映画を見てほしい。「メー」すなわち「母」なるメコン川²⁾本流のダム建設を巡っては、下流域国は上流域国のダムを批判するものの、下流域国にも内在する矛

2) ラオス語ではメコン川をメーナムコーンと呼ぶ。メーは母、ナムは水であり、メーナムは川、コーンは川の名前を指す。

盾があることを知った。それを踏まえて、この作品では、自分自身もしくは身近な環境に内在する矛盾と葛藤する人物を中心に据えたいと考えた。そして、その人物を通して、矛盾を100%解消することは簡単なことではなく、何かを得ようとすれば必ず犠牲を伴うという側面を十分に理解した上で、メコン川の環境に配慮した持続可能な方策を模索していく必要があることを伝えたかった。また、メコン川の問題を考える時、民族的帰属意識や国民意識といったものが重要なのではなく、自分たち自身が何に価値を見出し、どのようなアイデンティティをもつかが重要だと私自身は考えている³⁾。環境問題に関していえば、この映画の撮影中にもラオスでは4万家屋が全壊する大きな洪水がおきた。メコン川の問題だけではなく、環境問題は私たちが思う以上に深刻になりつつあるということ認識するべきだ⁴⁾。こうした問題に対する解決策は他の活動でも提案することができるけれど、私は映画を通して観客自らが考え、行動を起こしてくれるよう映画で後押ししたいと思っている⁵⁾。



図1 2020年6月時点のメコン本流ダム
Stimson websiteより筆者作成

アニサイ監督が語るように、この映画には多くの複雑な問題に対する監督のメッセージが込められている。本稿ではラオスの文化文脈を踏まえて映画を読み解いてみたい。

1. 映画に登場する人物に想定される場所・国・ひと

1-1. 母=メコン川

ラオス語においてメコン川の「メー」は母を意味しており、メコン川は「母なる川」の意味になる。映画内においても、母は顔がほぼ映し出されず、ベッドに横たわり身体に管を通され、血液を採取され続けている

る。その点においても、母はメコン川を表し、血液を採取されている様子はメコン川がダム建設によって水そして栄養を搾取されている状態を表現している。

映画内における母の血液は、世界に1%しか存在しない貴重な血液として描かれ、欧米企業がこの血液を高値で取引をすることによって、兄弟で母の取り合いが起きる。この点は、ダム建設をめぐるメコン川流域国のあいだで対立が起きている現状を思わせる。

また、欧米企業が高値で母の血液を取引するがゆえに母の血を売ろうとする家族の姿は、西欧諸国が始めた世界経済、資本主義的近代世界システムにこの地域も例外なく飲み込まれており、世界のグローバル化と無関係ではいられない現状を重ねているようだ。国際連合の指標にしたがって後発開発途上国という分類に差別化された国は、その分類から抜け出し、国際連合の指標でいうところの発展した国として認められるために、国の政策目標を立てなければならない。母が弱ろうとも、世界システムに迎合せざるを得ない状況を示している。

母がメコン川であることを想起させる弟セの次の

3) "Moving the Mekong: An Interview with Kulikar Sotho and Anysay Keola" by Hoo, Shawn. <https://b-side.city/post/moving-the-mekong-an-interview-with-kulikar-sotho-and-anysay-keola/> (2021年1月8日閲覧)および "A Dialogue on *Painting with Light*. In Conversation with the directors of *Mekong 2030*" <https://www.nationalgallery.sg/blog/painting-with-light-dialogue-directors-mekong-2030> (2021年1月8日閲覧) 参照。

4) 映画プロデューサー Alex Curran-Cardarelli より提供された「MEKONG 2030 Press Kit」内「Director's Quotes」参照。

5) 注3の1番目の記事参照。

行為は印象的である。セが兄宅で病院のベッドに横たわる母を見つけた際、母の足先を2回やさしくなぞるように触り、その手を自分の額から目頭に掛けて2回おく。すると、母の視線なのか、水の中からセを見上げるような映像に変わる。その水を思わせる映像からも母はメコン川であることが明らかである。母に触れ、その手を額に2回かざす行為は、映画の終盤にセがメコン川に入り、川面に手をかざす場面においても再現されている。ラオスでは、仏教信仰を实践する場において三宝、すなわち仏法僧に敬意を払う「3」という数字が大切にされているが、セと母の場面においては「2回」が大切にされている。この2回には、川に住む水の神ナーガに対するラオス人の信仰心が表れているように思われる。3回は仏教に対するものであるために避け、額に手を2回かざすことで川への敬意を表したのではないだろうか。また、ラオスでは一般的に足は頭に対して低い価値しか与えられていないため、兄宅でセが母の足に触れる行為は、その価値を低く見られている母に対するいたわりの心を表しているとも言える。水中からセを見上げる映像になる場面は、こうした敬意を川に払うことによって、川の主がその行為の主体を認識するという意味であるようにも思える。

1-2. 兄=中国

この映画において、兄は自国内のメコン川上流域に11のダムをもつ中国であると見ることができる。2020年8月、中国の李克強首相が瀾滄江メコン川協力首脳会議⁶⁾にて「流域の6カ国は同じ川の水を飲んでおり、家族のようなものだっていい」と述べた⁷⁾。メコン川流域国に対して莫大な経済的支援をおこなっている中国が流域国を家族と捉え、家父長制における「父」、すなわち庇護者として流域国を支える態度を示していることを考えれば、作品内に父を登場させても不思議はなかった。しかし、この映画では父の存在は全く描かれていない。家族の物語で

6) 中国がメコン川流域5カ国（ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア）との協力関係構築のため2015年に創設した瀾滄江メコン開発協力Lancang-Mekong Cooperation (LMC)の首脳会議。

7) 中華人民共和国駐日本国大使館「李克強首相、瀾滄江・メコン川協力首脳会議に出席 流域の水資源協力を提唱」2020年8月24日（<http://jp.chineseembassy.org/jpn/zgyw/t1809402.htm>）（2021年1月8日閲覧）

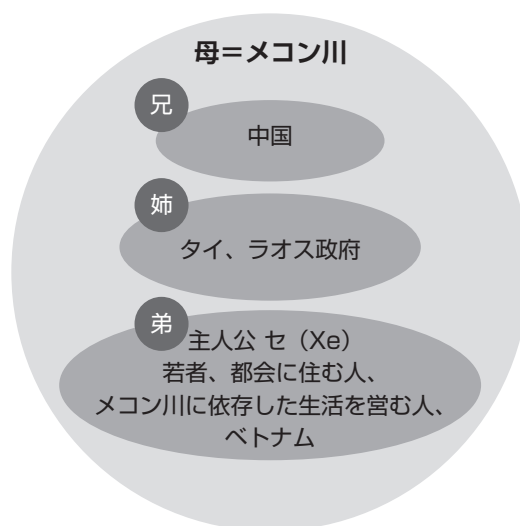


図2 The Che Brother 相關図

あるのに少々不自然なほどである。

この点から、メコン川流域国にとっての中国は、家父長制における父ではなく、母を共有する兄・弟・姉なのだという主張が示されているように思われる。メコン川最上流国である中国は、兄であるとしても父ではないとの主張が、家族を描きつつも父の存在を完全に消し去っている点に見ることができる。

ラオスの文脈で考えれば、一党独裁の現政権は歴史的にベトナムとの結びつきが強いため、兄と言えは常にベトナムであった。しかしこの映画における兄という存在はメコン川上流に位置する中国と言えそうである。

1-3. 姉=タイあるいはラオス政府

この映画において、姉はタイと思える部分もあれば、ラオス政府と捉えられる部分もある。それは常に兄と姉、姉と弟、という二者間関係において考えることが必要である。

1-3-1. 兄=中国、姉=タイ

▶姉の回想シーン

実家にいる母を、兄が手下のものを使って担架で無理矢理連れ去ろうとしている。姉はそれを阻止しようと、兄に向かって「私たちの母さんをどうする気？」と詰め寄る。兄は「母さんは俺と一緒にいた方が安全だ」と姉を突っぱねる。姉が「自己中！卑劣！親不孝者！」との罵りを兄に浴びせかけると、兄が怒って姉を殴る。

上記の回想シーンで兄が述べた「母さんは俺と一緒にいた方が安全だ」という台詞は、2015年に中国が瀾滄江メコン開発協力(LMC:Lancang-Mekong Cooperation)を創設し、これを利用してメコン川管理を主導しはじめた点とイメージが重なる。また、兄と姉の間に埋めがたい溝があるかに描かれている点も、LMCに対してタイが好意的に捉えていない点と重なって見えてくる。浜中慎太郎によれば、タイには瀾滄江メコンに関する国際会議の開催を最初に提唱したのはタイであるという自負があり、それを中国がLMCという「制度」として実現し、手柄をもっていったという思いがあるという。さらに、メコン地域のリーダーを自任するタイは、LMCの枠組みにおいては中国の影響力が過大で自国が軽視されているとも感じており、LMCひいては中国を快く思っていない側面があるという[浜中2018]。これらの要素を考慮すると、兄と姉の関係は、兄が中国、姉がタイと捉えられる。

回想シーンで姉が兄に浴びせかける言葉も興味深い。「親不孝」は上座仏教国において最も業の深い行為であることから、一般的に忌避される行為である。その台詞を兄に浴びせかけることは最大の侮辱と捉えることもでき、その侮辱に怒り心頭に発した兄が姉を殴るという通常では考えられない暴力行為が描かれている。中国においても伝統的な儒教の教えに従えば親不孝は慎むべき行為と言えるだろうが、それが上座仏教国における親不孝と同等の意味をもつのかは不明である。しかしながら、この場面上座仏教の文脈から考えれば、相互に中傷することや破壊的な暴力行為に訴えることは解決を導かないといったメッセージが含まれているとも考えられる。

1-3-2. 兄=中国、姉=タイあるいはラオス政府

この読み解きにおいては弟も含めた三者関係で見る必要があるが、弟の詳しい解釈は次項に譲り、この項における弟の解釈については軽く触れるのみとする。

姉をタイあるいはラオス政府と読むとき、関係してくるのは、ラオス国内のメコン川本流に建設されたサイヤブリダムである。このダムは、ラオス政府が外国為替収入を増加させることで、ラオスの社会的・経済的発展のための資金を調達する目的で推し進め

られたプロジェクトである。ダム建設にはタイ資本が投入され、建設もタイ企業のチョー・カンチャーン社が担い、2019年10月より稼働を始めたサイヤブリダムで発電された電力の95%はタイへ売電されている。

サイヤブリダムは中国領を除いて史上初めてメコン川本流に建設される水力発電ダムであったことから、計画当初⁸⁾よりメコン川下流国であるベトナムやカンボジアから強い懸念が示されていた。また、ベトナムやカンボジアに限らず、ラオス人、タイ人を含むメコン川の自然資源に依存して生きる何百万人もの人からも建設反対の声があがっていた。こうした背景を考えると、映画の中に描かれる姉はダム建設を推進したラオス政府ともタイとも捉えられ、反対の声をあげた人たちの代表を弟と読むことができる。

姉がダム建設を推進している立場にいたることが分かる場面は、下記の兄の回想シーンおよび映画後半に弟七がことの実態をあばく車内シーンの2箇所である。2箇所とも姉が外国人スタッフに母の血液を採取させており、母の体に繋がれた大きさな機械はまさにダムを象徴しているかのようである。

また、下記の回想シーンにおいては、兄と姉の関係を前項と同じく、兄が中国、姉をタイと見ることができる。

▶兄の回想シーン

実家にて外国企業のスタッフが母から血液を採取している傍らに姉が立っている。部屋の扉を兄が拳で叩く。兄「母さんに何かするのはよせ！危険すぎる。」姉「分かっているわよ。でもお金が必要なの！兄さんみたいに金持ちじゃないのよ。」

すでに述べたように、タイはLMCをたちあげた中国のやり方に賛同していないが、タイが中国の代わりにメコン川問題を主導できる状況にはない。上記の回想シーンでは、「兄さんみたいに金持ちじゃないのよ」という台詞によって、メコン川流域のリーダー的存在であることを望んでいたタイが中国の豊富な資金に勝つことができず、ままならない現状への苛立ちを表していると同時に、LMCの枠組みにおける両国の微妙な溝が描かれている。

8) 2010年9月22日にラオス政府が公式にサイヤブリダムの計画をメコン河委員会(MRC)へ提出。

実際のところ、上記の回想シーンにあわせて、兄が中国、姉がラオス政府と考えた時、兄である中国がメコン川本流のサイヤブリダムを批判した事実はないが、ラオス政府が自国の発展のためにはお金が必要であり、ダムの建設は必要不可欠と考えていることから、潤沢な資金をもつ兄＝中国と、自分たちの生活のためにはダム建設をして外貨を稼ぐ必要があると主張する姉＝ラオス政府とも読めるのではないだろうか。

この映画における兄・弟・姉を国に置き換えて考えるとき、なぜ兄が中国、弟がベトナム（後述）、姉がタイもしくはラオスであるのかを考えると、そこには各国の家族制が父系であるか母系であるかを反映させている様子が窺える。姉がタイもしくはラオスであるのは、両国が伝統的に母系制を共有する社会であることが関連しているように思われる。メコン川の変化のために姉家族が別の場所へ引越した際、姉も一度は家族とともに移動したものの、姉だけが母の世話のために戻ってきたとする場面にもそうした社会制度が反映されている。

1-4. 主人公：弟セ(Xe)

映画の中で唯一名前が出てくるのは弟のセである。映画の導入部からチェ・ゲバラの『モーターサイクル・ダイアリーズ』⁹⁾を想起させる古そうなサイドカー付きバイク¹⁰⁾で弟が登場することからも、「セ」はチェ・ゲバラの「チェ」をラオス語読みにしたニックネームであることが分かる。バイクを下りて友人と別れる際には、そのバイクで全国各地をめぐる旅に出る計画を友人と確認しており、チェ・ゲバラさながらに彼の有名な台詞“Let the world change you, and you can change the world(世界に君を変えさせよう、さすれば君が世界を変えることができる)”¹¹⁾を得意げにつぶやいている。この姿から、卒業後は広い世界を自分の目で見て回り、世界を変える存在に自分になるのだといった大志もしくは若者特有の理想を抱いている様子が窺える。

9) 日本で出版されている訳本のタイトルは『チェ・ゲバラ モーターサイクル南米旅行日記』。

10) バイクはおそらく中国産の長江CJ-750、BMW-R75型オートバイ・サイドカーのレプリカ。

11) 旅をすることで世界を知り、それによって君が変わるなら、君も世界を変えることができるとの意。

また、かつての自分の部屋にゲバラを描いた絵があったり、ゲバラの有名なポートレートでゲバラが被っていたベレー帽子¹²⁾があったりと、長い期間、チェ・ゲバラに傾倒してきた様子が詳細に描かれている。セのチェ・ゲバラへの傾倒ぶりは、姉がセに卒業祝いとして英語版書籍『The Motorcycle Diaries』を渡す場面や、その日記を書いた若かりしゲバラが実際の南米大陸旅行時に乗っていたとされるバイクと類似のバイクを兄がセにあげようとしていることから理解できる。兄の家に戦闘態勢で乗り込んで行く時の服装も、まるでチェ・ゲバラが戦闘に向かう姿かのようなものである。このように入念にチェ・ゲバラに傾倒する弟セを描きこんだ監督がセに託した役割は次の4つと読み解くことができる。

1-4-1. チェ・ゲバラに扮したセ＝若者

1つ目の役割は、正義を信じ、未来を変える力を自分もっていると信じているが、現実を直視できていない未熟な部分をもつ若者という存在である。若者特有ともいべき言動は、映画内のセの台詞の随所に見ることができ、とくに象徴的なものは兄や姉と対峙する場面に現れている。兄の回想シーンの後、弟とのやりとりの中で、兄（中国）は自分が母（メコン川）を助けようとした保護者なのだと言主張するが、弟は母を搾取して金儲けする兄を責める。その責めに対し、兄は世界の人を助けるために良いことをすると同時に、貧乏から抜け出すために血を他国へ売ることが悪いことだとは思わないと弟を諭すが、弟はそれは正しいやり方ではないと言い、正義を信じ理想を追い求める若者であるかのように兄に歯向かう。自分を騙した姉に対しても同様である。しかしながら、正義を振りかざしても解決しない現実的な問題を突きつけられて打ちひしがれる姿には、若者期に誰もがもつような葛藤が描かれている。

12) キューバ人写真家アルベルト・コルダが1960年、反革命的テロリストの攻撃を受けて136名のキューバ人が命を落とし、その葬儀に参列したときのゲバラを撮影した写真。ゲバラが亡くなった1967年以降にその写真を元にしたポートレートなどが世界に出回っている。この写真でゲバラが被っている帽子には赤い星は付いていないが、後年、様々なポートレートが出回る中で、共産主義の象徴となる赤い星をベレー帽に描くようになったものと思われる。セのベレー帽にも目立つ赤い星がついている。

1-4-2. 街から戻るセ＝都会に住む人

2つ目は、問題に直面する場所から距離があるために問題を直視できていない人たちが、現実を理解できていない人たちを表していることが劇中音楽「A Certain Distance」とその場面から読み解ける。セは自分の家へ帰る道すらはっきりと覚えておらず、友人に「自分の家なのに場所を覚えていないのか」と突っ込まれるほど長い期間、実家を離れている。また、家に帰る道すがらすれ違った母子に怪訝そうな一瞥を向けられ、母子は急いでマスクを装着するが、その意味をセは理解できない。そして、実家である高床式家屋の階下に吊された魚捕りの網が埃をかぶっているのを見つけ、長らく使われていないことを訝る様子も見せる。それらの描写から、生まれ育った実家と現在自分が暮らしている場所・環境・時間との距離が示されている。監督がインタビューで「メコン川を景色としてしか見ておらず、深刻なダメージを受けている川に直接影響されることがない都市部の人たちにこそ、この映画を見てほしい」と語っていることから、この点がセに描かれていることは明らかである。

1-4-3. 兄や姉に反発するセ

＝メコン川に依存した生活を営む人

3つ目の役割は、1-3-2で述べた通り、メコン川上流のダム建設に対して反対の声をあげたメコン川の自然資源に依存して生きる何百万人という人の存在であり、特にラオス国内のメコン川沿いに暮らす人々を代表する側面もあるように思われる。彼らにとってメコン川は環境破壊は直接的に自分たちの生活に大きな影響を及ぼし、生命に関わることでありながら、国が貧しいままで良いとまでは思っていない。そして、国が「発展」するためには水力発電ダムの建設と他国への売電によって外貨を稼ぐ必要があるという現実を前に、自分たちの生活の犠牲か国の発展の犠牲かを迫られているような状況にあり、一党独裁政権である政府に力強く最後まで歯向かうことは許されない、叶わない現状を表しているかのようである。

1-4-4. 葛藤を抱えるセ＝ベトナム

4つ目の役割は、ベトナムの存在である。チェ・ゲバラは生前の1966年に「2つ、3つ、数多くのベトナム

をつくるために」というメッセージを発し、ゲリラグループを組織することを目的にキューバから南米大陸へ戻っている¹³⁾。この言葉にも表れているように、チェ・ゲバラはベトナムに高い関心を払っていたことが分かる。そのチェ・ゲバラと弟セを関連付けたところにも、監督が暗にセの存在をベトナムに被せたとも言える。実際にアニサイ監督は、具体的な国名を挙げていないが、この映画はメコン川下流国が上流国のダム建設に反対しているにも関わらず、自国内にもダムを建設しようとしている現実の矛盾に着想を得たと話している。その文脈に従えばカンボジアも対象に入るが、カンボジアとチェ・ゲバラの相関が不明であることから、本稿ではベトナムとの関連を述べるに留める。

近年、メコン川下流域で毎年のように水不足や干ばつが問題となっているのは、上流のダムを管理する中国が原因だとの見方が強まっており、特にベトナム南部の穀倉地帯メコンデルタと中国のメコン川をめぐる問題は更に深刻化している[The Asahi Shimbun Globe 2020]。セが兄の豪邸へ向かう場面からセが母を兄から奪い返すまでの間に流れる音楽「Wonder 不審」、「Conflict 対立」、「War 闘争」は、中国とベトナムの関係悪化を暗示しているかのようである¹⁴⁾。

また、ベトナム政府は先に述べたサイヤブリダム建設に対しても強い懸念を示していただけでなく、2011年時点ではメコン川本流の下流域に計画されているダム建設の全てを10年間凍結するようにも要請している¹⁵⁾。近年においても、メコン川上流のダム建設に反対するベトナム国内の声は根強く、この点においては長年友好関係を築いてきたラオスとベトナム両国間に関係に亀裂が走る重大な問題と言える。

しかしながら、監督が示唆している通り、ベトナムも、メコン川本流ではないまでも、メコン川の国際支流セサン川にダムを建設しており、そのダムが下流のカンボジアに被害を及ぼしている。更に複雑な

13) エルネスト・チェ・ゲバラ、2004年、p.188。

14) この場面では迫力あるアクションシーンが展開されている。アニサイ監督はラオス人観客が好むアクションシーンを入れることで、映画自体に興味をもってもらう意図があったと語っている(MEKONG 2030: Directors in Dialogue参照)。

15) メコン河開発メールニュース2011年12月5日「サイヤブリダムをめぐる諸問題(その7)」(http://www.mekongwatch.org/resource/news/20111205_02.html) (2021年1月16日閲覧)

ことには、2019年6月にベトナム商工省が「2021年以降にベトナム南部で電力不足が生じる可能性がある」と発表し、2020年1月にラオスとベトナムの間で電力輸出増加の合意がなされている。2019年以前もラオスからベトナムへ電力輸出が行われていたが¹⁶⁾、2021年以降に電力不足になるという予測に鑑み、ラオス南部で開発中の5つの水力発電所から電力を買う契約を締結したのである。

このように、メコン川をめぐる問題は、ダム問題だけをとっても複雑な様相を呈しており、一筋縄ではいかないのが現実である。その複雑さに立ち向かう存在としても、この映画の中で唯一名をもつ存在としてセが重要な役回りを担っている。

1-4-5. なぜチェ・ゲバラなのか

ここで更に「なぜチェ・ゲバラなのか」を考察するため、映画内の小道具である書籍『モーターサイクル・ダイヤリーズ』に注目してみると、この書に描かれた旅の終盤でチェ・ゲバラがおこなった印象的なスピーチと監督の考えに類似点を見出すことができる。ゲバラはペルーのハンセン病療養所でのボランティア活動を終える前日に24歳の誕生日を迎え、療養所のスタッフに誕生日を祝ってもらった御礼に次のようなスピーチをおこなっている。

無意味な国籍により国が分かれています、南米大陸は1つの混血民族で形成されているのです。ゆえに偏狭な地方主義を捨てて、ペルーと統一された南米大陸に乾杯しましょう¹⁷⁾。

アニサイ監督はインタビューにおいて、「愛国主義的な考えや民族主義的な考えは世界がグローバル化すればするほど移り変わっていくものであるため、そこに価値を置くことには意味がない。国家主義的な考えを守るのではなく、私たち自身が何に価値を置くかが重要であり、環境に配慮しつつ持続可能な開発を互いにどう見出していくかが最も重要だ」との考えを示

している¹⁸⁾。ゲバラのスピーチと同じとは言えないまでも、そこには、「メコン川を互いに共有する6カ国は国籍で分かれた別物のように見えるかもしれないが、国籍や地域に囚われるのではなく、メコン川を共有する1つの大陸であることを意識し、互いが共有する資源から利益を得つつも、どのようにその資源を持続的に守っていきけるのかを団結して考えていく必要がある」との重要なメッセージが隠されているように思える。映画の英語タイトルはThe Che BrotherとBrotherが単数形ではあるものの、Theがついていることから家族を示しているとも言え、また、ラオス語タイトルはアーイ・ノーン・セ（「アーイ・ノーン」は兄弟の意）となっていることから、この流域はひとつの兄弟であるとの意も含まれていると考えられる。

2. 川岸の老人とラストシーンが意味するもの

映画の最後に描かれている2つの場面とその両場面に流れる音楽「In the Clouds」が印象的であり、示唆的である。1つ目の場面は、メコン川沿いに座る老人がVRゴーグルをしながらラオス伝統弦楽器カニャッピーの調律をし、弦を切ってしまう場面である。とてもミスマッチで不可解な場面に見えるものの、このミスマッチさこそ意味がある。そこには、文明の力によって作られた物を使い、見たいものだけを選んで見ることが出来たとしても、伝統的なもの、もしくは手元あるいは物事がおきている現場をしっかりと見つめずに物事を進めようとする、加減を見失い、行き過ぎて決壊してしまうとのメッセージが込められているようである。

もう1つの場面は、セが兄が住んでいたメコン川沿いの豪邸を再度訪ね、ベレー帽を脱ぎ捨てて歩き出す場面である。兄の家と思われる豪邸は、すでに誰もいない。建設途中でコンクリートがむき出しになり、足場が組まれたままのこの豪邸は、あたり一帯何もないメコン川沿いにぼつりと建っており、周りの景観と調和しているとは言い難い巨大さである。まさにダムそのものを表しているかのようである。その建物に足を踏み入れ、ベレー帽を脱ぎ捨てて更に一歩踏み出すセの姿が示すのは、目の前に立ちはだ

18) National Gallery Singaporeのインタビュー記事より。

16) ラオス国内のメコン支流セコン川流域ダムセカマン1・3にはベトナム企業が進出しており、電力がベトナムへ輸出されている。

17) 映画「モーターサイクル・ダイヤリーズ」(DVD、2005年)の字幕より書き抜き。本の翻訳(pp.161-162)とは少々異なっているものの、字幕の方が要点を分かりやすく訳しているため、字幕を採用。

かる問題の解決方法をはっきり見出せないまでも、憧れや理想であったチェ・ゲバラの幻想から目を覚まし、しっかりと自分自身の目と足で不確かな未来へ歩き出そうとする決意のようである。そして、監督の「若者たちよ、しっかりと現在の問題を自分事として考え、行動し始めよう」とのメッセージにも読めるのである。

3. 映画「メコン2030」プロジェクトとアメリカの関係

映画「メコン2030」プロジェクトは、ラオス北部の世界遺産都市ルアンパバーンで2010年より毎年12月に開催されているルアンパバーン映画祭 (Luang Prabang Film Festival) 主催のプロジェクトである¹⁹⁾。本映画プロデューサーの一人であり、映画祭の創設者であるアメリカ人ガブリエル・S・クーパーマンによれば、「メコン2030」プロジェクトは、日に日に危険な状態となっていくメコン川の状況に光をあてる必要から生まれたという。危機に瀕している生活資源であるメコン川を含む環境を積極的に守るための議論や活動に観客が参加してくれるよう、映画を通して観客の動機づけを行うことが目的である²⁰⁾。そうした目的をもつ本映画は、中国以外のメコン川流域5カ国(カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナム)の監督たちが、それぞれの文化を通して見つめたメコン川の10年後を描いた5つの話で構成されている。

2019年初頭に始動したこのプロジェクトにおける監督の選別は、各監督の実績や国内外の評価を基本としつつも、プロジェクトの目的を理解し、変化をもたらすことに積極的な姿勢を示してくれる人物であることが重要視されたようである。選出された5名の監督たちは、2019年3月にヴィエンチャンで開催された3日間のセミナーに参加し、映画の出資者であるMRC (Mekong River Commission)²¹⁾、Oxfam、The Asia Foundationからメコン川やそれを含めた

19) 映画祭の立ち上げは2009年。

20) MEKONG 2030 Press Kit より。

21) メコン川委員会。1957年10月、カンボジア、ラオス、タイ、ベトナムの4カ国によって設立。最初の委員会事務局はバンコクに置かれたが、現在はヴィエンチャンに本部がある。委員会設立時の主な役割は「メコン河下流における水資源開発計画の立

環境が現在直面している様々な問題についての講義を受けており、その後、各自が作品制作に取り掛かっている²²⁾。2019年12月にヴィエンチャン市内で関係者を招いたプレミア上映会を実施後、2020年以降はコロナ感染拡大により多少予定が狂ったものの、各映画祭などで上映を行っている。監督たちの来日は叶わなかったものの、2020年東京国際映画祭でも本作品は上映されている。こうした映画祭の巡回を通して、このプロジェクトの主眼である「世界中の観客に対して、メコン川が直面している差し迫った状況についてオープンに話す土台を作り、解決策を提案してもらうこと」がまさに実行されている。

ひとつ注目したいのは、この映画プロジェクトの目的や時期が米国政府の政策と奇妙な一致をみる点である。

2020年4月、メコン河下流域開発 (LMI: Lower Mekong Initiative)²³⁾ が米国政府が資金提供する環境調査会社Eyes on Earthの報告²⁴⁾ を発表し、2019年に下流諸国(タイ、ベトナム)で起きた干ばつと中国におけるダムの放水制限には関連があると指摘した。更に2020年9月、アメリカはメコン川流域の東南アジア5カ国(ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー)とメコン-米国パートナーシップ (Mekong-U.S. Partnership) を締結し、その初会合でポンペオ国務長官は「中国共産党が一方的にダムを操作し、メコン地域の歴史的な干ばつを悪化させ

案と調査を促進し、調整し、監理し、統制すること、及び構成各国政府を代表して、特別の財政的技術的援助を要請し、かかる援助を個々に受け入れ、管理すること」とされている(『メコン川委員会の現状と展望に関する研究報告書』p.3参照)。

22) 映画の資金出資者はこの他、Heinrich Böll Stiftung Southeast Asia。各プロジェクト予算は3万ドル。ラオス作品は、アニサイ監督の脚本が8月に完成し、そこから撮影準備に入り、9月頭の5日間で撮影をしている。

23) 2009年7月に米国とメコン河下流域国との協力を相互に支援していくために構築された枠組み。ベトナム、カンボジア、ラオス、タイの4カ国がパートナー国。保健、環境、インフラ、教育の4分野を重点分野として米国が支援。2009年の創設以降、米国はLMIを通じて越境的犯罪対策、メコン川の水資源管理、持続的なエネルギー開発といった事業に約35億ドルを費やしている。2010年頃からアメリカ国務省は東南アジアにおける「水資源安全保障 (water security)」問題としてメコン川における上流国のダム建設が下流国に与える影響に注目してきた経緯がある。

24) 「昨年にタイやベトナムで起きた干ばつの時の川の水位を衛星画像から測定した。下流の水位が下がったのは、中国のダムがある上流域で流れが妨げられたからだ」という報告。The Asahi Shimbun GLOBE November 2020 No.235, p.03.

ている」との声明を出して中国を痛烈に批判した。この新たな協定において、アメリカはMRCを通じた「水資源安全保障の強化」などを重点分野にすえ、総額約1.5億ドルの支援提供を約束した。中国もLMIのLower Mekongに対抗するかたちで、2015年にメコン川上流を強調したLancang-Mekongという名称を用いた瀾滄江メコン開発協力(LMC)を創設しているが、こうした2020年のアメリカの動きに対し、同年8月に開催された第3回メコン・瀾滄江協力首脳会議にて李克強首相は、アメリカの息がかかったMRCとは別の中国によるメコン川の水文データ共有のためのプラットフォーム構築を宣言している。こうした米中対立の中でメコン川流域の水資源管理は安全保障問題化しつつあり、今後のさらなる混乱が懸念される。

映画に話を戻し、こうしたメコン川流域における米中対立を際立たせる報告書を作成したEyes on Earthに着目してみると、「メコン2030」プロジェクトとの関連性が細いながらも見えてくる。環境調査会社Eyes On EarthのWebsiteは非常に簡易的なもので、設立経緯の説明もなく、Blogは2018年1月に唐突に始まっており、2018年1月の次は問題の報告があがった2020年4月に飛んでいる。Reportsも6本掲載されているのみで、年が明確に記されているのは2019年メコン・デルタ地帯の報告と2020年4月の報告の2本となっている。確固たる証拠もなしに述べることは控えるべきであるが、Eyes on EarthがLMIの資金を得て本格的なメコン川流域の調査を開始したのは2018年あたりからではないかと推測される。また、LMIの後継のメコン・米国パートナーシップの資金を得てメコン川流域の調査をしているのは調査会社StimsonとEyes on Earthで、StimsonはUSAIDと「メコン2030」出資元の1つThe Asia Foundationから資金援助を受けている。LMIもメコン・米国パートナーシップもUSAIDであることを考えれば、資金の出処と目的は同じだと言えそうである。

上記の米中対立の構図を考えると、2020年のEyes On Earthの発表、ならびにメコン・米国パートナーシップ締結は数年前より2020年に合わせて計画が進んでおり、その米国政府の計画の1つにこの「メコン2030」プロジェクトも含まれていたと考えられる。「メコン2030」プロジェクトは2019年初頭に始動し

ていることから、2018年内に資金がある程度確保されていたと考えられる上に、映画のスポンサーであるThe Asia FoundationならびにMRCにはアメリカの資金が入っている。そして、ルアンパバーン映画祭のパートナーにラオスの在アメリカ大使館が入っている点を併せて考慮すると、無関係とは言い難いのである。

おわりに

こうした状況の中で制作された「The Che Brother」は、プロジェクトが自国ラオスの映画祭主催であることも関係するのか、5本の作品の中では最も流域国の政治的駆け引きを示唆するような内容である。しかしながら、中国援助頼みの開発を続けるラオスにおいて、表立って中国を批判するでもなく、中国と対立するアメリカの資金を得ているからといって極端にアメリカの主張を後押しするでもなく、アニサイ監督独自の視点を盛り込んだ作品に仕上がっていると言えるのではないだろうか。

参考文献・資料

参考文献

- *特に記載のないWebsiteの最終閲覧は全て2021年1月17日。
- 青木まき 2020 「米中対立と政治化するメコン川水資源管理問題」『アジア研究所所報第180号』亜細亜大学。
- 中華人民共和国駐日本国大使館 2020 「李克強首相、瀾滄江・メコン川協力首脳会議に出席 流域の水資源協力を提唱」2020年8月24日〈<http://jp.chineseembassy.org/jpn/zgyw/t1809402.htm>〉
- エルネスト・チェ・ゲバラ 2004 『増補新版 チェ・ゲバラ モーターサイクル南米旅行日記』棚橋加奈江訳、現代企画室。
- Eyes on Earth. 2020. “Monitoring the Quantity of Water Flowing Through the Upper Mekong Basin Under Natural (Unimpeded) Conditions” April 10, 2020.
- 太田昌国、星野智幸 2004 「対談 太田昌国+星野智幸 ゲバラとは誰か」『現代思想2004年10月臨時増刊 vol.32-13 総特集チェ・ゲバラ』青土社、pp. 12-26。

- 浜中慎太郎 2018 『瀾滄江メコン (中国・メコン) サミット 日米ADB抜きの協力が大加速』 アジ研ポリシー・ブリーフ No.117, 2018.07.12 IDE-JETRO. <<https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/PolicyBrief/Ajiken/117.html>>
- Hoo, Shawn. 2020. “Moving the Mekong: An Interview with Kulikar Sotho and Anysay Keola: Transnational filmmaking and conversations on shared histories, geographies and environmental consciousness”. 09-09-2020. <<https://b-side.city/post/moving-the-mekong-an-interview-with-kulikar-sotho-and-anysay-keola/>> (2021年1月16日閲覧)
- 滝本浩司、比良井慎司、グエン・ティ・タン・ザン 2019 「商工省が電力需給見通しを発表、2021年以降に南部で電力不足の可能性(ベトナム)」 JETRO ビジネス短信 2019年7月9日 <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/07/0cc0ca55dc03beab.html>>
- 山田健一郎、庄浩充 2020 「ラオスからベトナムへの電力輸出増で合意(ラオス、ベトナム)」 JETRO ビジネス短信 2020年1月10日 <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/01/a7376fa0f6eb601e.html>>
- 庄浩充、山田健一郎 2020 「ラオスからの電力輸入を拡大へ、ベトナム電力総公社が覚書締結(ベトナム、ラオス)」 JETRO ビジネス短信 2020年12月16日 <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/12/5a60c17e098533c5.html>>
- 国際協力事業団・国際協力総合研修所 1996 『メコン川委員会の現状と展望に関する研究報告書』 <https://www.jica.go.jp/jica-ri/IFIC_and_JBICI-Studies/jica-ri/publication/archives/jica/field/pdf/96_15.pdf>
- Luang Prabang Film Festival. 2019. *Luang Prabang Film Festival 2019 Annual Report* <https://www.lpfilmfest.org/wp-content/uploads/2020/04/Annual_Report_2019.pdf>
- メコン・ウォッチ 2009 『メコン河支流におけるベトナムのダム開発と国境を越えたカンボジアへの環境社会影響に関する調査研究』 <http://www.takagifund.org/admin/img/sup/rpt_file20039.pdf>
- National Gallery Singapore. 2020. “A Dialogue on *Painting with Light*: in Conversation with the directors of *Mekong 2030*.” <<https://www.nationalgallery.sg/blog/painting-with-light-dialogue-directors-mekong-2030/>> (2021年1月16日閲覧)
- 日本経済新聞 2020 「米中、メコン川「管理」巡り対立 東南アジアに影響力競う」 2020年9月8日電子版. <<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ063583320Y0A900C2FF8000>>
- 日本経済新聞 2014 「メコン川流域国が首脳会議、ダム建設巡り対立」 2014年4月5日電子版 <https://www.nikkei.com/article/DGXNASGM0501O_V00C14A4FF8000>
- 日本国外務省 2011 「メコン河下流域開発 (LMI) 閣僚級フレンズ会合 (概要)」 2011年7月22日 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/j_mekong/lmi_1107.htm>
- The Asahi Shimbun Globe. 2020 「干上がる大河メコン 上流のダム、争いの火種に」 2020年11月 No. 235, p. 03.
- Thomas, Jason. 2019. “Does Lao’s Xayaburi dam benefit its people?” 31, October, 2019. *The ASEAN Post*. <<https://theaseanpost.com/article/does-laos-xayaburi-dam-benefit-its-people>>

参考Website

*特に記載のないWebsiteの最終閲覧は全て2021年1月17日。

Eyes on Earth <<https://www.eyesonearth.org/>>

Heinrich Böll Stiftung Southeast Asia <<https://th.boell.org/en/homepage>>

MEKONG2030:Directors in Dialogue <<https://vimeo.com/491541505>> (2021年2月10日閲覧)

MEKONG2030:Viewing Guide <<https://mekong2030.org/resources/>>

Mekong River Commission <<https://www.mrcmekong.org/>>

MEKONG-U.S. Partnership <<https://mekonguspartnership.org/>>

メコン・ウォッチ メコン河本流ダム開発 (下流部) およびセサン・スレポック・セコン川流域ダム開発 関連メールニュースを含む <<http://www.mekongwatch.org/report/tb.html>>

Oxfam <<https://www.oxfam.org/en>>

Stimson <<https://www.stimson.org/project/mekong-infrastructure/>>

Stimsonの2020年6月時点のメコン川本流ダムの地図 <<https://www.stimson.org/2020/mekong-mainstream-dams/>>

The Asia Foundation <<https://asiafoundation.org/>>

USAID Mekong Lower Initiative <<https://www.usaid.gov/vietnam/lower-mekong-initiative-lmi>>